

生涯学習の新しい方向についての提言

－「船岡塾」における生涯研究の試みを軸に－

安部 耕作
(近江八幡市)

【要旨】

日本の大学が就職予備校化・専門学校化している中で、幅広い教養を学ぶ中で深い思考力や人間と人間関係の形成・人間としての発展を学ぶ学習の場としての「大学・大学院としての実質」を備えた組織・機関をどこに求めたらよいのか。大学の他には、既存の市民大学があるが、おおむね公民館で開催される生涯学習講座に近い。公民館との相違は単位や修了証を交付したり、講師が著名であることなどである。そこで、既存の大学や市民大学などとも異なる生涯学習の新しい方向としての教育・学習に値する営みを実践する場が必要である。

そのような必要性に応える一つの試みとして、平成 19 年 4 月 8 日に発足した「船岡塾」という私塾の実践について考察し、生涯研究・学習の発展の試みとして提示する。

1. はじめに

経済大国と言われる日本の生活は豊かであろうか。物質的に繁栄していればそれで豊かなのか。サービス業界の偽装管理職問題に代表される長時間労働や乏しい個人の自由時間を考えると少なくとも個人の生活という面からは日本は豊かとは言えないのではない。このような疑問や疑問を解決していくための行動につながるベースが教養であり、人間としての成熟であり、様々な人間との交わりによる知見の交換による人間としての成長であろう。

生涯学習を人間が生きていくにあたり必要な活動ととらえるならばそのような時間の量的確保が重要となる。しかし、そのような時間の確保は容易ではない。長時間労働を実質的に規制する法律がないため日本人の労働時間は総じて長い¹⁾。労働時間が長いだけではない。企業のQC等の自主的改善活動やイメージアップのための交通安全活動や運動会等の人間関係諸活動・行事といった労働以外の活動にも、自主的参加が建前とはなっているが人事考課の対象にもなっているため自主的に拒むのは困難であり、労働者はこのようなことでも時間を奪われている²⁾。自治会、PTAや子ども会等にはほぼ自動的に加入となり、加入の選択の余地はないことが多い。自治会に加入しなければ家庭のゴミも出せないケースもある。これに伴い、様々な役が当てられ、必要性に乏しいイベントや地域行事、地域の祭りに強制的に動員される。活動が消極的であったり活動の見直し・廃止を提言すると逆に意識の低さが、問題にされる³⁾。社会教育においても事業消化のため社会教育団体等に対して動員が、要請される⁴⁾。筆者も社会教育職員として動員を日常的に要請している。

地域づくりを念頭におくならば、このような現状に対して筆者は、＜個の確立と共同性

＞の追求という理念を提唱した⁵⁾。すなわち＜個の主体性確立＞と＜地域における共同性＞という理念に集約されるということにほかならない⁶⁾。この場合、個人の主体性を強調すれば消費的な個人の学習に終わり、共同性を追求すると上述のような組織や地域に個人が囲い込まれてモノも言えない状況になる。私見では学ぶことにより人は発展するのであり、学ぶことにより生活全面の豊かさにもつながる。学習がまずは豊かな生活実現の端緒となると思われる。そのような意味では、趣味・消費的な学習としての一面が見られる生涯教育・生涯学習を越える概念が必要である。それが生涯研究という発想に求められないだろうか⁷⁾。生涯学習という今実践している学びを例えば論文や具体的な作品にしてみるという生涯研究にまで発展させることで、生涯学習以上の文献や知見にあたる必要が生まれ、同じような生涯研究を実践する他者の意見を聞いたり他の研究を聞くことで教養が深まる。それは個人の豊かな人生にも発展していくだろう。

しかし、＜個の確立と共同性＞という理念をベースにして幅広い教養を学ぶ中で深い思考力や人間と人間関係の形成・人間としての発展を学ぶ学習の場が現在の日本にあるだろうか。ひとつは既存の大学・大学院が考えられる。しかし、少子化や大学間競争の激化により、日本の大学が目先の受験生獲得のために就職予備校化・専門学校化している一面が見られる。もうひとつは既存の市民大学があるが、大学という名を冠していても実態は公民館で開催される生涯学習講座に近い。公民館との相違は、単位や修了証を交付したり、講師が著名であることなどである。公民館の生涯学習講座が地域の講師が地域住民に対して開講されるのに対して、市民大学はそれよりも著名な講師が公民館よりも広範に受講者を求め、受講者数も多いという程度の相違といえるだろう。

既存の文科省認可の「制度として存在する大学」は人間関係の形成や教育・学習・研究機関としての好ましい遺産を今だ保持している。これらを取り入れつつも、就職予備校化・専門学校化する過程で大学持つこうした好ましい遺産や、＜個の確立と共同性＞という理念をもとにさらに深い人間形成・人間関係の形成や教養を深めて人生における豊かな学びを端緒に生活を豊かにしていくという新たな魅力を加えて、それを実践していく場が求められていると言えるのではないだろうか。

このような＜個の確立と共同性＞という理念の実現のために、生涯学習の新しい方向として生涯研究という発想を共同で実践する場として発足したのが「船岡塾」である。生涯教育・生涯学習という概念については中央教育審議会答申や研究者によって様々な解釈がある。近年の解釈では、単に消費的な学習に終わらず学習成果をまちづくりにつなげたり、人間関係の形成や発展に活用することがうたわれている。しかし、深い教養や人間形成・人間関係の発展に変わる概念とまではなりえていないのではないか。本稿の目的は、この生涯研究という概念の実践の場として平成 19 年 4 月 8 日に発足した「船岡塾」のこれまでの現状を紹介し、個人の人生における豊かな学びと＜個の確立と共同性＞実現のために生涯研究という概念とその実践の場が果たす可能性について考察することである。

2. 生涯研究の方向

(1) 既存の市民大学に関する考察

1) 既存の市民大学の現状

生涯学習振興法の成立を景気として全国各地に市民大学が設けられた。就職予備校化し

た一面が見られる大学に代わる人間関係の形成や教育・学習・研究機関としての「大学としての実質」を備えた組織・機関として、市民大学にそれを見いだす可能性があるのか具体例について検討した。学習時間が 20 時間以上、企画委員会を設置している、修了証書を発行している、市民参画が行われている、ボランティアや市民活動につながっている、という一定の条件のもとでも下記のような市民大学の具体例がある⁸⁾。

①メオトピアカレッジ(1988 年創設) 岩手県千厩町

特別講演とイベントがメイン。他にパソコンや歴史についての自主学習。担当講師は著名人が主で、自主学習は地域住民で行う。

②まちだ市民大学 H A T S (1989 年創設) 東京都町田市

講義と体験学習を通年講座と特別講座で行う。学習期間が長く環境や福祉、歴史をテーマにグループ学習や受講者のまちづくりへの参加をめざしている。

③八日市市民大学(1973 年創設) 滋賀県八日市市(合併後は東近江市)

主として講義。著名人の講演がメイン。これを機にラーニングサークルというサークルが作られたが、公民館のグループ活動とほぼ同様のようである。

④むなかた自由大学(1989 年創設) 福岡県宗像市

著名人の講演会と特別事業。学長はすべて元大学長。アンケート結果で誰の話を聞きたいかを決めている。

⑤いわみざわ市民大学

主として講義。内容は、人物、歴史、環境、文学、経済、文化、国際事情。

⑥大田原市民大学

主として講義。毎年テーマを決める。講師は専門家と著名人。

⑦かわさき市民アカデミー

講座と演習。総合的プログラムで、講座、演習、自主活動を別々に行う。

⑧鎌倉・市民アカデミア

主として講義を行う。

⑨東海道金谷宿大学

総合的プログラムである。

⑩市民学芸員制度(滋賀県長浜市)

講座・教室・講演会。「長浜学」を重視している。

⑪今治大学公開講座

明德短期大学との共催事業である。既存大学の公開講座とほぼ同様である。

⑫かどがわ大学

講義、ディベート、ブレインストーミングを行っている。

2) 既存の市民大学の限界と課題

以上の考察から、既存の市民大学の内容を分析すれば、既存の市民大学は公民館で行われている講座とほぼ同様の内容が多いといえよう。近江八幡市の八幡公民館の豆知識講座(全 10 回)や岡山公民館の岡山塾(全 5 回)等でも同様の事業を行っている。違いは、市民大学の方が講師の著名度が高いことや回数が多いこと、市民大学の多くは単位制であったり修了証を出していることである。上述の具体例の特徴を集約すると次の 2 点があげられる。

1. 著名人の講演

2. グループ活動やまちづくり活動への参画への導入

これらの特徴から、市民大学の多くが公民館が実施する連続講演会とほぼ同じと考えられる。公民館の講演会に、地域住民の「高級志向」と「著名人志向」を加えたものが既存の市民大学と言えよう。

しかし、市民大学に「大学としての実質」と地域住民の要望を連結させることは難しい。

「大学としての実質」だけでは、地域住民のニーズは満たされず、地域住民のニーズの充足だけならば公民館活動で十分である。

そこで、教育・学習に値する営みを実践する場の必要性に応える一つの試みとして、発足したのが「船岡塾」である。「船岡塾」は、参加者が豊かな人間形成・人間関係の形成に資するため主体的に学習という営みを行う生涯研究・学習の場となることをめざしている。

(2)生涯研究という着想

1)生涯研究という方向

「船岡塾」のスタンスは、「生涯研究」という概念である。学習ではなく研究とすることで、本来人間に備わっていると思われる能動性・主体性が発揮される。生涯にわたり前進し、精神的に豊かになり、発展的欲求を持ち続けかつ実践することが人間の発展の原動力であり、個人的欲求を集团的欲求へ転化することが人間の所以であるが、欲求が個人レベルの間は継続は困難である。集团的な論議を経て論文を書くことなどはこの発展的欲求の実現のひとつのあり方である。

2)生涯研究実践の場としての「船岡塾」発足の経緯

現在、生涯学習として実施されている講演や読書、グループ学習は受身の知的インタレストを満たす性格のものである。受身の知的インタレストから脱するために必要なのが人間的営みである。人間的営みとは人間として可能な限り豊かに生きたいという欲求であり、経済的向上・目的意識的な人間形成・共同の3つの特質がある。能動性を発揮することにより欲求の発展を現実のものとする。知的インタレストにおける能動性の発揮こそ人間的営みであり、論文を書くことは人間的営みの特質すべてを発揮するものである。このような能動的な知的インタレストを充たす場としては大学院が考えられるが、社会人の場合、職務状況や経済的理由により、継続が困難な場合が多い。そこで、既存の学習に代わる生涯学習の新しい方向としての知的インタレストの具体的実践の場として試行的に実施しているのが「船岡塾」である。

3. 生涯研究の実践

(1)「船岡塾」の概要

「船岡塾」の目的は、あらゆる世代の人々の生活の豊かさに資することを目的とする。

事業内容は、会員に資するため定期的に集まりを持ち、土曜日の午後および日曜日に塾を開くこととしている。

「船岡塾」では、会員の各種論文・レポートへの援助、文章の添削、「豊かさ」の具体的追求、交流会、良書の合評会などを行っている。参加者の主体的学習・研究を重視し、受身の講義は行わない。定期的に「船岡塾便り」を発行している。

主催者は、社会学者の飯田哲也である。

会員は、塾の趣旨に賛同し、主催者が認めた者である。現在は、20代～50代までの大学卒業者を中心に定期的に参加する正会員が15名、不定期に参加する協賛会員が15名在籍している。

正会員は定期的に塾の活動に参加・活用する者で、年会費は12,000円、大学生以下は、6,000円である。

協賛会員は、会の趣旨に賛同・支援し、不定期に活用する者で年会費 一口 5,000円である。

(2)「船岡塾」の活動状況

1) 会員による論文・研究報告

「船岡塾」発足後、平成19年4月から11月には以下のような報告や発表が行われた。

開催日	報告者	報告内容
4月 8日		塾開きスピーチ(今後10年間の研究計画)、ゆんたく
4月21日	大学院生	博士論文報告：伝統芸能の社会学的研究1
5月27日	大学院生	博士論文報告：伝統芸能の社会学的研究
	大学院生	修士論文報告：老年学の構築をめざして1
	大学院生	修士論文報告：子育て支援の発展を求めて1
6月 9日		早川洋行著『ドラマとしての地域運動』の合評会
6月24日	大学院生	博士論文報告：伝統芸能の社会学的研究3
	大学教員	研究報告：教育と公共性
7月 8日	大学院生	修士論文報告：老年学の構築をめざして2
	大学院生	修士論文報告：子育て支援の発展を求めて
	大学教員	研究報告：社会福祉学の新たな構築のため
8月26日	社会学者	研究報告
9月 2日	大学院生	修士論文報告：子育て支援の発展を求めて
9月17日		ゆんたく(全員による研究進捗状況の交流)
10月14日	市役所職員	学会発表資料報告：生涯研究の理論と実践のために1
10月27日		中田実著『地域分権時代の町内会・自治会』の合評会
11月 5日	市役所職員	学会発表資料報告：生涯研究の理論と実践のために2

2) 人間形成・人間関係の形成

会員の親睦を深め豊かな人間形成・人間関係の形成を築くため、ゆんたく(集まって自由に話し合う)や遊びを行う。「船岡塾」便りに会員が毎回コメントを執筆し、参加意識を高め意志疎通をはかる。

(3)「船岡塾」の開催主体

「船岡塾」の企画・運営は、企画から毎回の報告者の決定、「船岡塾」便り各号の内容の決定まですべてを主催者が手がける場合や、論文・研究報告について会員の希望により実施される場合などがある。

(4)「船岡塾」への期待

1) 会員の期待

定期的に発行される「【船岡塾】だより」には以下のような会員の「船岡塾」に対する期待が寄せられており、会員は次のような期待を持って参画している。

○大学院修士課程在学学生

多様な人々との交流や、船岡塾を通じての様々な人間関係の広がりを期待するとともに追求したい。

○大学院博士課程在学学生

「船岡塾」が近隣の地域住民にも開かれた場になることを期待している。民主的な意見交換を軸にして活動が行われており、そこに「船岡塾」の楽しさを感じている。

○市役所職員

単独の研究では接することの難しい多様な領域の研究にふれることが出来る場となること。会員間の報告や議論が自らの研究の裾野を広げるきっかけとなることを期待する。自身も積極的に発表し、「船岡塾」での学習と交流に期待している。

○市役所職員

論文を書くことや研究をすることの楽しみを知り、生涯にわたり研究を続けるテーマと研究能力を取得したい。

○大学院修士課程在学学生

修士論文の執筆に「船岡塾」の成果を生かしたい。

○定時制高校常勤講師

定時制高校での様々な生徒の課題に対処するため平常心を保ち理論的に分析することが大切であり、「船岡塾」で会員との交流を通して、日本社会への理解を深め、自らの理論水準を高め、視野を広げ、生涯にわたり研究できるテーマを模索し、それが生涯にわたる自己実現につながることを期待する。

○市役所職員

「船岡塾」は大学教員や学生、大学時代からの友人・知人との交流によって、自己を前進させるエネルギーを得て、自己を振り返る大切な場となっている。

(5) 「船岡塾」の状況

「船岡塾」は毎月2回主に午後2時から5時までを目処に定期的で開催している。参加者は毎回5～10名程度であり、報告者の報告について議論している。豊かな人間形成を目的に遊びや会食も重視している。報告は主催者が指定する場合と報告者が自ら申し出る場合の2つのパターンがある。報告の内容は特に決められておらず、大学院生である会員は修士論文構想や博士論文構想、社会人や研究者である会員は研究進捗状況や研究報告を行っている。主催者の企画による良書の合評会も行っている。また月2回定期的に発行される「船岡塾だより」に会員は輪番で研究状況や「船岡塾」への期待を寄稿し参加できない会員にも「船岡塾」の状況を伝えている。各会員が参画意識を持つことも定期的に寄稿を求める理由である。

(6) 「船岡塾」の開催場所

「船岡塾」は主催者である飯田哲也が、京都市内で購入した町家を拠点として開催している。京都市北区紫野北舟岡にある小さな町家であり、その地名が「船岡塾」という名称の由来となっている。「船岡塾」には私立大学を定年退職した飯田哲也が在職していた大

学の個人研究室や自宅で所有していた多数の書籍が移されて置かれており、各会員は参考文献を貸与・贈与されたり紹介されている。2階建ての小さな町家なので、2階には蔵書やテレビもあり、塾修了後は2階でテレビを見ながら団らんしたりもする。「船岡塾」では、これも人間関係形成の重要な活動ととらえている。飯田哲也は大学在職時代もゼミの最初の段階では、ボーリング大会や食事会等人間関係形成のための活動を重視していたと語っている。人間関係が形成されると、その後のゼミ運営も円滑に進み、ゼミ脱落者も減少したと述べている。単に各会員が研究報告をするだけではなく人間関係をしっかりと築くことがその後の継続した活動を進める上で大切であることを「船岡塾」で学ぶことができた。

(7)「船岡塾」の位置付け

教養を幅広く学ぶ中で深い思考力や人間と人間関係の形成・人間としての発展を学ぶ学習の場が必要である。そのような問題認識のもとで「船岡塾」は発足した。「船岡塾」以外にそのような場はないのか検討し、既存の大学・大学院や市民大学についてその現状について考察した。

既存の大学・大学院は、少子化や大学間競争の激化により、目先の受験生獲得のために就職予備校化・専門学校化している一面が見られ、幅広い教養を学ぶ中で深い思考力や人間と人間関係の形成・人間としての発展を学ぶ学習の場としての側面がやや弱くなっているのではないかということは指摘した。既存の市民大学は、著名人の講演やグループ活動やまちづくり活動への参画への導入を主たる内容としたものが多く、こうした特徴から、市民大学の多くが公民館が実施する連続講演会とほぼ同じではないかということ、公民館の講演会に、地域住民の「高級志向」と「著名人志向」を加えたものが既存の市民大学と言えるのではないかということが課題と言えるのではないかということもすでに指摘した。

「船岡塾」はこうした現状を克服し、生涯にわたって学習ではなくより主体性が求められる研究を行うという生涯研究を継続していく中で、教養を幅広く学び深い思考力や人間と人間関係の形成・人間としての発展を学ぶ学習の場を作っていく一つのあり方として発足したものである。従って「船岡塾」の位置づけは、既存の大学・大学院や市民大学の他に教養を幅広く学び深い思考力や人間と人間関係の形成・人間としての発展を学ぶ学習の場のあり方の一つの提示である。「船岡塾」は、平成19年4月に発足して以来まだ歴史が浅いこともあり、そうしたあり方を模索し試行錯誤しながら活動している。

(8)「船岡塾」の成果

「船岡塾」は上述したような既存の大学・大学院や市民大学の課題を克服し、生涯にわたって学習ではなくより主体性が求められる研究を行うという生涯研究を継続していく中で、教養を幅広く学び深い思考力や人間と人間関係の形成・人間としての発展を学ぶ学習の場を作っていく一つのあり方として発足したものである。平成19年4月に発足して以来まだ歴史が浅いこともあり、そうしたあり方を模索し試行錯誤しながら活動している。

しかしそのような試行錯誤しながらの活動の中からも、各会員は様々な職業や背景の会員に相互に報告や議論をすることで視野が深まり、それまで気づかなかった視点に気づくことができたといった成果があったと述べている。大学院生の会員は、大学院のゼミや指導だけでは得られなかった物の見方や視点、意見を得ることができて研究の視野が広まっ

たと述べている。社会人の会員は、職場や個人の研究だけでは気づかなかったことや、研究者や大学院生の会員から専門的な意見や助言を得て、研究や今後の研究計画、人生設計の参考となったと述べている。人間関係の形成を重視しているため会員は率直に意見を述べ合い、それが会員相互にとって有意義な結果をもたらしている。

各会員は既存の市民大学や大学・大学院の課題を克服するため、「船岡塾」が目指している幅広い教養を学ぶ中で深い思考力や人間と人間関係の形成・人間としての発展を学ぶという趣旨について実感しつつあり、わずかずつの前進ではあるかもしれないが「船岡塾」の成果があらわれているのではないかと考えている。しかし、「船岡塾」は、発足後の期間も短く試行錯誤しながらの活動であり、今後も趣旨の達成に向けて少しずつ前進していきたいと考えている。

4. おわりに

(1)「船岡塾」の可能性と今後の課題

1)「船岡塾」の可能性

①会員の研究の幅を広げる

「船岡塾」は現役の大学院生・大学教員、大学卒業者、社会人等多様な属性の会員で構成されている。会員は、このような場で論文・研究報告をすることにより多様な意見・考え方を得ることができる。

②人間形成・人間関係の形成

「船岡塾」では、ゆんたくや会食、ゲームなどの遊びも重視する。このような活動をとおして人間形成・人間関係の形成を深め、人間としての成長を期待している。

③「大学としての実質」を備えた場のモデルを提供する

制度として存在する現在の大学や公民館の講座、既存の市民大学とも異なる教育・学習に値する営みを実践する場としてのモデルを提供する。

④「生涯研究」概念の提唱と実践

生涯教育・学習では、消費的学習に陥りがちである。学習成果を論文にするという活動にまでつなげるといふ「生涯研究」を実践することで、人間の主体性が発揮される。

⑤会員の主体的学習・研究

人間にとって主体的活動を最重視する立場から、主催者の一方的講義は行わず、「船岡塾」は会員の主体性、主体的学習・研究を重視している。人間形成・人間関係の形成の立場から「遊び」も重視している。正会員は主体的に塾に関わり、塾は会員の「豊かな人生」の実現に寄与している。

2)「船岡塾」の今後の課題

①会員世代の拡大

今は、大学卒業以上の会員が主であるが、豊かな人間形成・人間関係の形成に資するためにも、将来的には、小・中学生・高校生・大学生も加わり受験勉強ではない学習へと広げていきたい。

②「豊かな人生」の実現

定期的に参加できない会員の「豊かな人生」¹⁾をいかに「船岡塾」の場で実現していくかが課題となっている。

③主催者の趣旨の会員への貫徹

豊かな人間形成・人間関係の形成のために主体的な学習・研究、定期的な参加をととして「豊かな人生」を実現していくという主催者の趣旨や思いをさらに会員に意志貫徹していく必要がある⁹⁾。

3)「船岡塾」からの提言

筆者のような正規職員としての職業を持つ社会人からすれば、会費も少なく主体性は求められるが月2回の緩やかな集まりである「船岡塾」は、時間や学費等の様々な制約のある既存の大学・大学院や市民大学に比べれば非常に参加・継続しやすい場である。筆者は教育委員会職員として公民館講座や市民大学を事業主催者として実施した経験もあり、社会人大学院生として大学院で学んだ経験もある。これらの経験に比較すれば、「船岡塾」は少人数で主催者の趣旨に賛同した会員を主体としているため、既存の市民大学や公民館講座よりも幅広く教養を学んでいく中で深い思考力や人間と人間関係の形成・人間としての発展を学ぶことが出来ていることは実感している。社会人学生として大学院に在籍した時も、どうしても職務が優先になり、十分に研究時間を取ることが出来ず、高額な学費も負担であった。このような経験からすれば多様な背景を持つ社会人やその他様々な人々が自己の可能な範囲で主体的に生涯学習をする場として「船岡塾」はありがたい存在であることは実感として認識している。そのような意味では生涯学習の新しい方向の一つの萌芽として「船岡塾」の取組を提言したいとは感じている。

もちろん「船岡塾」という私塾が、制度として存在する既存の大学・大学院の教育に代わると述べることも現時点では困難であるかもしれない。一私塾の取組を生涯学習の新しい方向であると提言することもやや大言壮語かもしれない。「船岡塾」の場合も主催者に依るところが大きく、誰にでもできる活動ではなく普遍性・一般性に欠けるかもしれない。しかし、飯田哲也は人生80年の時代を迎え、定年退職した大学教員に対しても「船岡塾」を定年後の大学教員の一つの生き方のモデルとして提示したいと述べている。大学教員の定年退職後も10～20年の自由な時間が存在する。この自由な時間をどう意義ある人生にしていくか。大学教員が定年まで蓄積してきた教育・研究に関わる知識を若い後進のために提供し、学習や研究の楽しさ、意義を制度に縛られないやり方で後進に伝え育てていくことのやりがい、生涯にわたって若い後進が主体的に研究してけるような基礎力を養い豊かな人生の形成を支援していくこと、定年退職後も多様な職種の多様な世代と学習・研究・人間形成・人間関係形成の場を持つことのできる生き甲斐を飯田哲也は述べており、会員である筆者の目から見ても昭和11年生まれの飯田哲也は若く生き生きとしているように見える。今後、団塊の世代の大学教員が大量に退職していく時代を迎えると思うが、それぞれの大学教員には教育や研究のあり方にそれぞれの思いがあるだろう。それらの思いを実現するような学習の場が全国にいくつも花開き、「船岡塾」は一つの事例であるがそのような取組が全国で展開され、そのような場で主催者の趣旨に賛同する多様な職種の多様な世代が集い既存の大学・大学院や市民大学とも異なった形式の生涯学習が展開され、それが生涯学習の新しい方向になっていくことを願って、「船岡塾」の取組を生涯学習の新しい方向として提言するものである。

注記・引用文献

- 1) 労働基準法では週 40 時間と定められている。しかし、一体どれほどの人がこれを守ることができているだろうか。いわゆる 36 協定や偽装管理職、人員を無視した仕事量やノルマ達成のための自主的なサービス残業など多くの抜け道がある。
- 2) 木本喜美子『家族・ジェンダー・企業社会』ミネルヴァ書房、平成 11 年、P.178
- 3) 太田肇『囲い込み症候群－会社・学校・地域の組織病理』ちくま新書、平成 13 年、pp.25-52
- 4) 朝比奈大作『図書館員のための生涯学習概論』（社）日本図書館協会、平成 10 年、p.39
- 5) 安部耕作「生涯学習の歴史的展開」榊本妙子・永久欣也・飯田哲也『豊かさと地域生活』窓映社、平成 18 年、pp.81-82
- 6) 同上書、pp.84-86
- 7) 飯田哲也『私家版生涯研究のすすめ－レポート・論文へのチャレンジ』ショウワドウ・イープレス株式会社、平成 13 年、pp.2-3
- 8) 田中雅文編著『社会を創る市民大学:生涯学習の新たなフロンティア』玉川大学出版部、平成 12 年
- 9) 「豊かな人生」については、注 5) の『豊かさと地域生活』の序章を参照のこと。